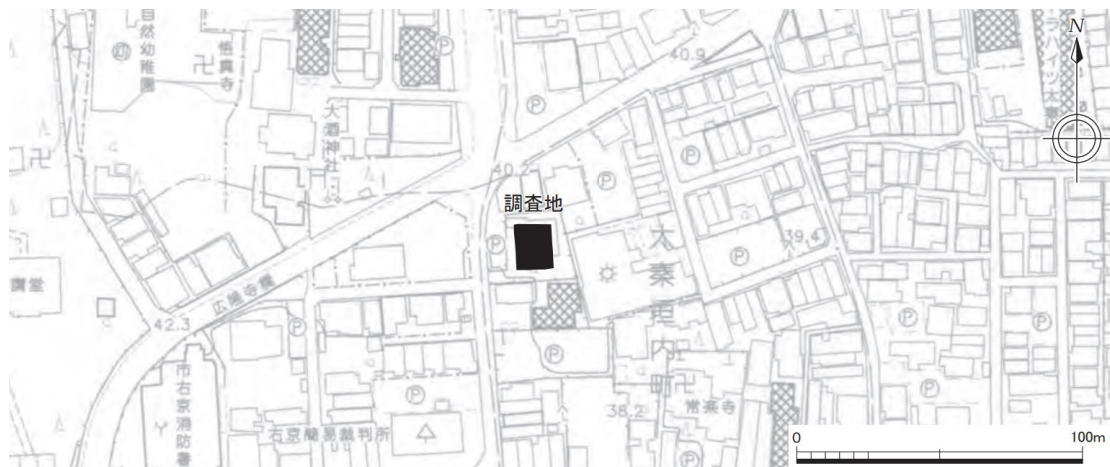


一ノ井遺跡(いちのいいせき) 京都市右京区太秦垣内町

●京都先端科学大学の国際学生寮太秦 B 棟の新築に先立ち、敷地の発掘が行われ、室町時代初頭から中ごろの掘立柱建物、鎌倉時代前半の柵と、井戸や土坑などの遺構が確認された。聖徳太子信仰の霊場として広く信仰をまつめた中世の広隆寺の隆盛にともなう門前の宅地等の遺跡であると考えられる¹。

太秦^{うづまさ}広隆寺^{こうりゅうじ}にほど近いこの辺りでは、縄文時代から人間の活動の痕跡が確認され、古墳時代から中世において活発に土地利用が行われていたことが、これまでの考古学的調査で判明している。太秦 B 棟の位置は、これまで試掘等で部分的に確認されていた一ノ井遺跡の南西の隅にあたる。一ノ井遺跡の一連としては、面掘りによって建物の規模がわかるような発掘調査が実施されたのは今回が初めてで、中世の建物など遺構が確認されるという成果が出た。

太秦広隆寺は広く一般に、^{みるくぼさつ}弥勒菩薩がある秦氏の寺と認知され、現存するなかでは京都最古の寺院であることで知られているが、それにとどまらず、この太秦という場所で、古代・中世・近世・近代という時代をくぐりぬけてきた生きた遺跡であることには、注意しておきたい。とくに中世には^{しょうとくたいし}聖徳太子信仰の霊場として広く知られ、多くの参詣者を迎えて隆盛していたことが、この遺跡のなりたちと関係している。



調査位置図

今回の調査で検出された遺構のうち、とくに注目されるのは中世の^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物で、建物を支えた柱の形跡の列から、この建物の軸が真北よりも北西方向に傾いており、明確に広隆寺境内堂舎と平行した軸で建てられていることがわかった。この建物遺構から出土した土器類の検討から、室町時代初頭から中頃の建物ではないかと調査担当者は推測している。この状況からこの辺りは中世広隆寺の門前の宅地の一部であったとみられる。

¹ 株式会社文化財サービス編集・発行『一ノ井遺跡発掘調査報告書』2021年、以下遺構・遺物の出土状況についての情報および図版・写真は本書による。

この遺構と隣接して、鎌倉時代前半に推定できる遺構も確認されている。

柵のあとが2つ（柵列 237・柵列 238）確認され、径 0.7～1.0m という比較的大きめの柱を掘り立てた痕跡（柱穴）が列をなし、その基軸は北東に傾いていた。調査担当者は2つの柵遺構の柱の穴から出土した遺物の年代を検討し、柵列 237 が先行してつくられ、しばらくして柵列 238 に建て替えられた可能性を示唆している。

2つの柵の東側では、何らかの祭祀のあとと思われる土坑が検出された。土坑では13世紀中ごろと推定できる土師器の皿が、乱雑にではなく破損なく口を上にした状態で出土した。

このほかに素掘りの井戸の遺構も確認されており、13世紀後半までの時期のものと推定できる土師器・須恵器・瓦質土器など、多くの遺物がなかに投棄された状況で出土した。これらは言ってみれば生活雑器であり、宗教的な寺院空間や権力者の政治的施設にともなうものではなく、中世広隆寺の門前に集住していた人々の暮らしの遺産であると考えられる。

これらのことから太秦 B 棟の敷地あたりでは、鎌倉時代前半ごろの遺構群が廃絶したあとに、いったん人間の活動痕跡が途絶え、南北朝から室町時代中頃に、掘立柱建物・井戸・土坑の遺構があらわれ、隆盛する広隆寺門前の一角をなしたと考えられる。



調査地から北を望む

（人文学部歴史文化学科 教授 佐藤文子）